宮本武藏と勇少年

菊池寛

一

今から三四百年も前、日本の國が亂れて多くの大名が、銘々得手勝手の戰爭をしてゐた戰國時代から德川幕府が出來た頃にかけては、日本の國中に劍術や槍や馬などの名人が澤山ゐました。

上泉伊勢守、塚原卜傳、羽賀井一心齋、柳生但馬守など、みんな劍術の大名人で、それ〴〵自分の劍術の流儀を發明した人です。

私が、今お話しようと思ふ宮本武藏も、その時代に生れた劍術の大名人で、それは〳〵強い人ですこの人は、一生涯に六十遍も、劍術の仕合をしましたが、一度も負けたことがなかつたのです。劍術の仕合といつても、昔の劍術の仕合は、お面や胴を付けて竹刀でやるのではなく、何も體に付けないで堅い木刀で本當に叩き合つたのですから、負けた方は大抵は殺されてしまつたものです。時には木刀でやらないで、本當の眞劍でやる時もあるのです。劍術の仕合といつても、本當は眞劍勝負と同じであつたのです。こんな恐ろしい劍術の仕合を、六十遍もして、一度も負けたことのない宮本武藏は鬼のやうに强かつたに違ひありません。

その上、この人は二刀流といふ劍術を發明した人です。今迄の人は、刀一本で仕合をしたのですが、武藏は右の手と左の手と兩方に刀を持つて、仕合をしたのです。武藏が、何故二刀を使ふかと聞かれると、「どうせ命の遣り取りをする時には、持てるだけ刀を持つて、振り廻す方が得だ。」と、言つてゐたさうです。

二

武藏が、初めて劍術の仕合をしたのは、たつた十三の時です。その時武藏は、播磨の國の伯父の家にゐたのですが、丁度その土地へ有馬喜兵衛といふ武者修業の男が來て、人通の多い所へ、

「劍術仕合望む者には、何時にても相手になるべし

といふ高札を立てました。所が、武藏は手習ひの先生から歸る道で、これを見て、いかにも高慢なやり方だと思つたのでせう、持つてゐた筆で、この高札にメチヤクチヤに墨を塗つてしまひました。さあ、それを知つた喜兵衛は火のやうに怒つて、武藏のとまつてゐる伯父の家へ喧嗚り込んで來ました。武藏の伯父は、驚いて手を突きながら、

「ホンの子供の惡戯ですから、どうぞ勘辨して下さい。」と、詫りましたが、相手はどうしても聽きません。すると、奥から出て來た武藏は、

「伯父さん、何もそんなに詫ることはない。俺が、このお侍と劍術の仕合をすればいゝのだらう。」とビクともせずに言ひました。すると、有馬喜兵衛は益々怒つて、

「よし、それでは明日の朝、間違なく海邊へ來い。一思ひに斬り殺してやる。」と、約束して歸りました。

その翌る日、武藏は伯父や伯母が、「逃げろ〳〵。」

で相手を叩き殺してしまつたとのことです。

その時、武藏はわづかに十三でしたが、骨太く丈高く十六七には見えたとのことです。この仕合を、手初に一人で十二三人を斬り散らしたこともあり、佐々木小次郎といふ名高い劍術の名人を、倒したこともあり、いろ〳〵な手柄をしました。

三

この宮本武藏が、日本中を武者修業して歩いてゐた時のことです。江戸（今の東京）から、だん〳〵東の方へ旅をして、今の奥羽地方を廻つてゐた時ですある田圃道を通つてゐると、十一、二の少年が、一生懸命に泥鰌をすくつてゐました。武藏はつい泥鰌が欲しくなりましたので、

「おい〳〵少し泥鰌を呉れないか。」と、言ひますとその少年は武藏の顔をつく〳〵見てゐましたが、そこにあつた桶ごと呉れようとしました。武藏はそれを見て、

と勧めるのも聞かず、一人で約束の場所へ行きました。近所近邊の人達は大變な評判です。「可愛さうに武藏はあの侍に殺されてしまふのだ。」と、皆武藏を氣の毒に思つてゐました。が、愈々仕合になりますと、武藏は、刀も持たないで太い薪の棒を持つて向ひましたが、喜兵衛が打ち下す大刀を横に拂ふと、忽ち付け入つて、たつた一打ち

「そんなに澤山は入らない。少しあればいゝのだ。」と言ひますと、少年は、

「いや、折角旅の人が呉れと言ふのだから、みんな上げよう。俺は掬へばいくらでも取れるのだから。」

と、言ひました。武藏は、その少年の物惜しみをしないキレイな心に感心しながら、その泥鰌を貰つて別れました。ところが、丁度その晩でした。武藏は廣い野原の眞中で、道を迷うて、大變徒足をした後で、漸く一軒の百姓家を見付けたので、中へは入つて一晩泊めて呉れいと頼みました。ところが、出て來たのは、壹間武藏に泥鰌を呉れたあの少年でありました。少年は、武藏を見ると、

「あゝ、壹間の方ですか。今家には誰もゐないで、御飯もロク〳〵上げられないが、それでもよければお泊りなさい。」と言つて、粟の御飯が少し殘つてゐるのを、出して呉れました。武藏は、その粟の御飯を喰べると、そのまゝ、ゴロリと横になつて寢ました。

ところが、夜中にふと、ゴシ〳〵といふ物音が、裏の方から聞えて來るのです。それで氣が付いて見ると、自分の横に寢てゐた少年の姿が見えないのです。その中に、ゴシ〳〵といふ物音は、頻りに續いて來るのです。どうも、刀を磨いてゐるやうな物音です。さすがの武藏も、一寸氣味惡く思ひました。こゝは強盜の住家で、あの少年は自分を刺し殺すために刀を磨いてゐるのではないかと思ふと、強い武藏も何となく寢られません。その中もゴシ〳〵といふ音は絶えず聞えて來ます。武藏は寢られないので寢返りをしたり、咳をしたりしてゐました。すると暫くして、裏の戸をあけて、例の少年がピカ〳〵光る短刀を持ちながら、は入つて來ました。そして、こんなことを言ひました。

「さて〳〵、お客様は見かけに依らぬ臆病な方ですな。私が、刀を磨いてゐるから、寢られないなんてたとへ私があなたを殺さうとしたつて、十二歳の子供ですもの、知れたものではありませんか。」

これには、さすがの宮本武藏も一本參りました。子供に似合はぬ大膽さに驚きながら、

「それなら、なぜ今頃刀などを磨いてゐるのだ。」と聞きました。

「さう聞かれるのなら、お話しませう。實は、私の母は三年前に死に、姉は遠い村へ嫁に行き私と父と二人きりで、暮してゐたのですが、父が長い間の病氣で、丁度昨日の夕方死んでしまつたのです。そして、死骸は奥の間に置いてあるのです。母の墓がある山へ持つて行つて、埋めようと思つてゐるのですが、死骸が重くつて、運べないのです。それかといつて、近所に頼む人はないので、一層のこと死骸を二つに切り、半分宛運ばうと思つて、死骸を切るために短刀を磨いたのです。」と、言ひました。武藏は、その話を聽くと、子供とは思はれないほど、大膽な思ひ切つた考に驚いてしまひました。そして、この強く勇ましい少年に感心しました。

「よし、それなら切るには、及ばない。俺が手傳つて死骸を運んでやらう。」と、武藏は少年に手傳ひをして、少年の父の死骸を山へ運んでやりました。

さて、少年の父の葬式を濟せてから、武藏は出立することになりましたが、少年には頼るべき親類もないので、武藏は、

「どうだ、俺と一緒に武者修業に出ないか。若しさうすれば、立派な武士にしてやる。」と言ひました。すると、少年も欣んで、武藏の伴をすることになりました。愈々出立といふ時に、少年は、

「この家を殘して置くと、山賊などが住家にするといけないから。」と言ひながら、自分の住んでゐた家に火をかけて燒いてしまひました。

この話でも分る通り、昔の少年は十二や十三でも驚くほど心がしつかりしてゐて、大膽で勇氣があつたやうです。尤、今の少年の方が、昔の少年より學問もあり、悧巧であるかも、知れません。が、悧巧で學問がよく出來ても、心がしつかりしてゐて勇氣がなければ、エライ人間にはなれません。

五

昔の豪傑などといふ者は、たゞ劍術が上手であつたり、力が強かつたりで、外には取柄はない人が多いのですが、宮本武藏は書も名人で、その上彫物までが上手でした。おまけに學問があつて、「五輪書」といふ本を書きました。この本には戰爭や劍術の奥義(一番大切なこと)をスッカリ書いてあります。この人は自分で格言を作つて守つてゐましたが、その中の一個條に「神佛を尊んで頼まず」と、いふのがありました。神樣や佛樣は、エライ方だから尊みはするが、神樣や佛樣のお蔭で得をしようと思ふのは卑しいといふ立派な考です。ある時、武藏が十人もの相手と斬合ひをする約束をして、その場所へ行く道で、ある八幡樣の前を通りかゝりました。武藏はいつもの通りに、丁寧にお辭儀をしましたが、さすがの武藏もその日の仕合が心配であつたと見えて、フラ〳〵と八幡樣にお頼みする氣になつてつい神前の鈴の紐に手をかけましたが、その時ハッと自分が守つてゐる「神佛を尊んで頼まず」といふ格言を思ひ出したので、逃げるやうに神前を去つて、仕合の場所へ急いだといふことです。神樣や佛樣に「お金が出來るやうに」とか、「長生きが出來るやうに」とか頼むのは、物事の分らぬお爺さんやお婆さんのすることで、私達は宮本武藏と同じやうに、神樣は尊んでも、頼まずに、自分のことは自分の力でやらなければならぬと思ひます。(をはり)